

蛍の棲む小川へ

五條市立五條東中学校 三年 米田^{よねだ} 理乃^{りの}

蛍の放つ光は、華やかな花火とはまた違った趣があります。昨年、私は「枕草子」を国語で勉強しているときに蛍のことを思い出しました。平安時代に生きていた清少納言は、「ほのかに一匹、二匹が光っている」蛍が趣深いと書いていました。そして、それ以外にも、「多く飛び交っている」蛍の姿も良いとありました。しかし、私は清少納言が書いたような「飛び交っている」ほどの蛍の姿は見たことがありません。

私の家の近くに流れている小川では六月から七月頃にかけて蛍を見ることができました。それでも、ほのかに数匹が順々に光っていただけです。そして最近はというと、その小川で蛍を見ることはなくなってしまいました。

私の住む五條市には吉野川が流れています。蛍の住んでいた小川もその吉野川の支流なのですが、観察できる蛍は全部で三種であることが分かりました。中でもゲンジボタルとヘイケボタルは水ボタルであり、幼虫の期間を水中で過ごします。今、日本で蛍がどんどん見られなくなっているそうですが、どうやら原因は川にあるようです。蛍が生息することのできる川にはいくつもの条件がありますが、私は今回二つの事柄に注目して問題点を考えました。

まず一つ目は、水質についてです。意外なことに蛍が生息できる水質は、山の上流で流れているほどのきれいさは必要ありません。むしろ、蛍の棲む川は少し濁っている「ややきれいな水」であることが多いようです。これは幼虫の餌となるカワニナが育ちやすいためです。カワニナは水中の藻を食べます。そして藻はきれいすぎる川では発生しないのです。しかし当然、汚れすぎている川ではいけません。例えば、大量の生活排水や農薬が流れ込むような川では蛍は到底成長することはできません。では、家の近くの小川はどうでしょうか。川底は濁っていて、ゴミもところどころに見受けられます。空き缶やペットボトルの蓋が開いたまま川に浸かっているものもあります。直接、生活排水が垂れ流されているようなことはないようですが、やはり水質は気になりました。

二つ目は川の周辺環境についてです。まず、蛍が生息するには川の岸边が土であり、草が生えている必要があります。幼虫から蛹になったときに土の中に潜る必要があるからです。これも先ほどと同じで、ゴミの問題があります。どこからか流れ着いて埋もれているビニール袋や小さなゴミが環境の安定を壊し、蛍を棲みにくくしているのではないのでしょうか。

では私には一体何ができるのでしょうか。私一人の力で川の水質や周辺環境を大きく改善させることはできません。しかし例えば、地域で行っているクリーン活動に参加したときに小川の清掃を提案してみることはできるかもしれません。また、日常生活の中でも心がけることはたくさんできます。たとえ私の家の生活排水が直接あの小川に流れずとも、なるべく水を汚さずに使うことは

大切なことです。料理や洗濯の無駄を減らすこと、生ごみの有効活用、プラスチック使用量を意識して減らすこと…。私の使う毎日の水は巡り巡って小川に繋がっているという気持ちは忘れずにいたいと思っています。

清少納言が蛍を見ながら、こんなにも環境のことを考えていたとは思えません。平安時代より人間の生活がずいぶん豊かに、便利になっていったことと引き換えに、蛍の生息場所は少なくなっているのです。いつか蛍がたくさん飛び交ってくれるような小川に戻ることを願っています。そのために皆で水のことを考えてみませんか。